●―ヨーロッパ

作法を身につけ、心を込めて

森井裕一（もりい・ゆういち）
東京大学大学院総合文化研究科・准教授

地域研究者の軌跡

①生年・出身地……一九六五年、群馬県

②専門分野・地域……国際政治学、EU研究、ドイツ研究・ヨーロッパ、ドイツ

③学歴……上智大学外国語学部卒、東京大学大学院総合文化研究科国際関係論専攻修士課程修了、同博士課程中退

④職歴……琉球大学法文学部政策科学・国際関係論講師（二八歳、五年間）、筑波大学国際総合学類講師（三四歳、一年間）、東京大学大学院総合文化研究科准教授（三五歳～）

⑤現地滞在経験……ドイツ（二一歳、二六歳、各一年間、留学生）

⑥研究手法……政策形成などの研究が中心なので資料調査、インタビューなどを行う。多くの場合、歴史にはなっていなかったり進行中の対象を扱うので、背景を理解したり裏付けをとるために聞き取り調査を行っている。

⑦所属学会……日本EU学会、日本国際政治学会、日本ドイツ学会

⑧研究上の画期……ドイツ統一。どのような対象を研究したら良いか定まっていなかった大学院生の時に、漠然とした研究対象であったヨーロッパが急速に大きな変化を示し、それまで想像もできなかった展開が見られた。統一による社会の変化、EUの成立やより広い国際秩序の変化によって研究対象が大きく拡大した。

⑨推薦図書……遠藤乾編『ヨーロッパ統合史』（名古屋大学出版会、二〇〇八年）

メッセージ――作法も身につけ、心を込めて対象に接する

学部の頃「国際組織論」という国連を中心とした国際組織に関する講義を聞いて国際関係における国家の協力という問題に興味を持った。ちょうどヨーロッパで域内市場を完成させるプロジェクトが進んでいたので統合研究を始めたが、冷戦が終わってドイツが統一しEUが成立した。国際政治から入ったので今でも外交を中心としてEUとドイツの政治が接する部分を中心に研究しているが、グローバルな課題にEUやドイツがどう立ち向かっているかに興味を持っている。

地域研究者は対象地域を細部まで知り尽くし、その地域での空気感まで理解できるように心を込めて接する必要がある。しかし、同時に研究にあたってはその地域の何が普遍的であり、何が固有なのかについても議論できなければならない。それを可能にしてくれるのがディシプリンである。学問の方法、作法にもさまざまなレベルがあり、フォーマルな理論から描写的に因果を説明するものまできわめて多様だが、何らかの学問の作法を身につけていないと他地域の研究者や、しっかりしたディシプリンを持った研究者と対話が成り立たず、単におもしろいトリビア情報をたくさん知っている地域マニアで終わってしまう。政治学や法学や経済学など伝統的なディシプリンとの対話を可能にするためにも、既存の学問のお作法をひとつでもしっかり理解しておくことはとても重要である。

EU研究や現代のヨーロッパを研究することは、安全保障、政治協力、経済活動、文化交流などと直結している。グローバル化が進んだ現代の社会ではそれぞれの地域が孤立して存在することはなく、いつでも国際社会や他地域との関係性のなかで存在して、相互に関係を持っている。この関係性をどのようにマネージして安定した国際社会を構築できるかを研究することが現在の興味の中心となっている。もっとも、ヨーロッパは距離的には遠いし、現地に駐在している外交官やビジネスマンには最新情報の入手という点ではかなわない。しかし研究者は長期的なパースペクティブや分析の手法によって対象を違った角度から説明したり、さらに分析に基づいて提言を行うことも可能である。

ヨーロッパ研究はEUの発展やグローバル化によって国や地域の仕組みも変化しているので非常に複雑になっている。一人の研究者にできることは限られている。だからこそ、対話可能な方法を使って隣接領域の研究者と関わりながら研究を進めなければならない。